

日立市の子どもたちに甲状腺検査の必要性

茨城大学名誉教授 小林 正典

2011年3月15日～16日に福島第一原発から飛散した放射性プルームは、茨城県の県北から関東地域を広く襲い、ヨウ素131の大きな被ばくや汚染を引き起こしました。ヨウ素131は半減期8日と短いことから、汚染マップを作成のために調査した時点では、ヨウ素131はほとんど検出されず、また、ヨウ素は気体で、土壌沈着が少ないことから、ヨウ素131汚染の実態は半減期1570万年のヨウ素129の分析を通して得られたヨウ素131土壌濃度が得られている程度です。

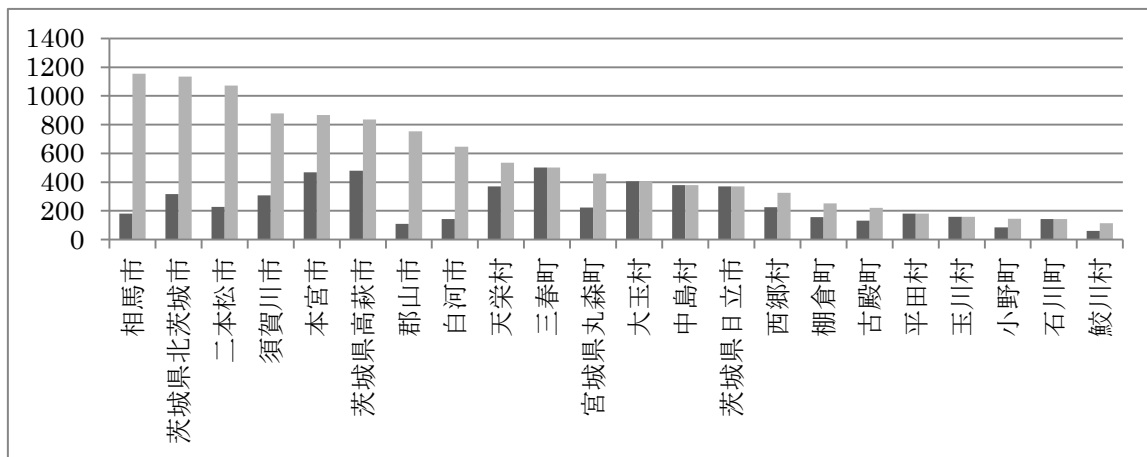


図1 ヨウ素129の分析を通して得られたヨウ素131土壌濃度(単位 Bq/m²)(最小値と最大値)

北茨城市での甲状腺検査で3人の子どもが小児甲状腺がんおよびその疑いと診断されましたが、北茨城市でのヨウ素131汚染が福島県のそれに同等なものであったことが原因と思われます

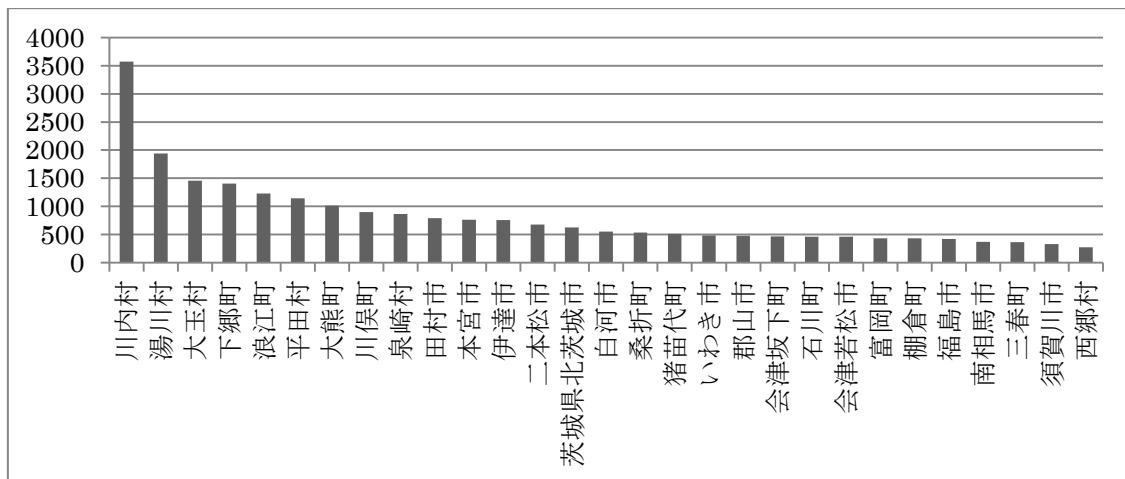


図2 2011年度～2014年度までの小児甲状腺がんの有病率(18歳人口100万人対)

日立市よりもヨウ素131土壌濃度が低い、福島県の西郷村、棚倉町、石川町、平田村でも小児甲状腺がんの子どもが発見されています。そして、茨城県北茨城市での有病率は、図2において

丁度中間に位置しています。日立市と同等な汚染の大玉村では、その北茨城市をはるかに上回る有病率となっています。

各産地のホウレンソウの測定結果を基に、ヨウ素 131 プルーム汚染の実態を考えてみるのは、甲状腺検査実施を検討するうえで意味のあることと思われます。各都県が 2011 年 3 月 15 日から 44 日間のホウレンソウのヨウ素 131 の測定結果は、食品流通構造改善促進機構の食品の放射能検査データに掲載されています。それらの中には採取日が近いデータが存在し、福島県と茨城県の比較が可能であることがわかりました。もし仮に、両県が同じ濃度のヨウ素 131 汚染と仮定するならば、福島県のデータは 3 月 28 日採取し 3 月 29 日に検査した結果であり、茨城県のデータは 3 月 30 日採取し 3 月 31 日に検査した結果であることから、福島県の方が茨城県の場合よりも高く測定されることとなります。しかしその結果はそうにはなっていませんでした。

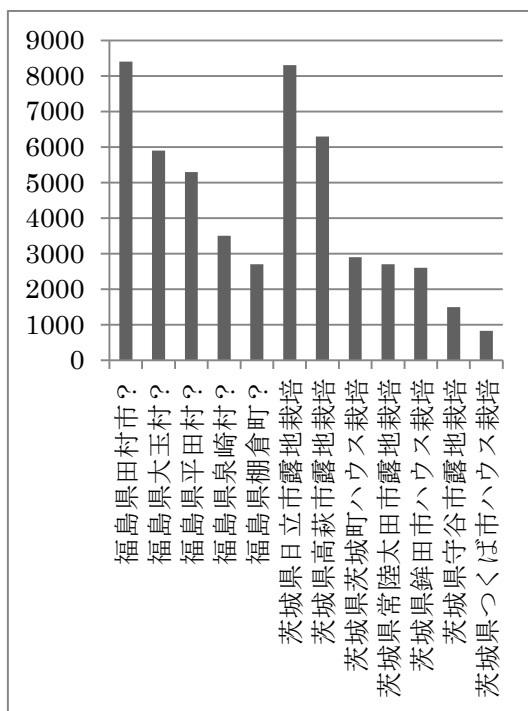


図 3 福島県と茨城県のホウレンソウのヨウ素 131 の測定結果 (Bq/kg) の比較

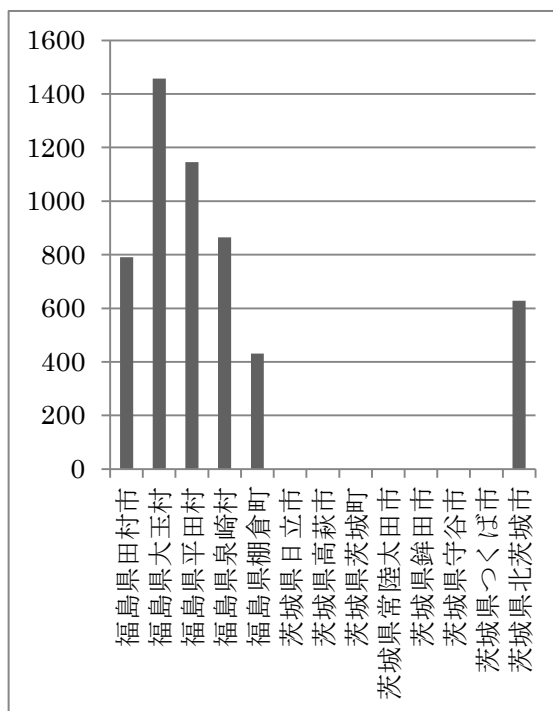


図 4 福島県と茨城県での小児甲状腺がんの有病率 (18 歳人口 100 万人対)

図 3 はそれらの結果を比較しています。福島県田村市、大玉村、平田村、そして茨城県日立市、高萩市の場合が、5000 Bq/kg を超えていることがわかります。そして、両県での結果はほとんど差がないように思われます。このことは、すでに示したヨウ素 131 土壌濃度の図 1 でも再確認できます。これは茨城県のヨウ素 131 汚染が、福島県と同等程度であることを意味します。そこで、図 4 には、図 3 で示した地域に茨城県北茨城市を加えて、すでに小児甲状腺がんの有病率がわかっている福島県の結果を示します。日立市の子どもたちがヨウ素 131 に被ばくしたことが心配です。子どもの甲状腺がんが大変心配され、日立市は甲状腺の検査を早期に実施すべきです。